
よくわからない少女達の家路

ありすきやるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よくわからない少女達の家路

【Nコード】

N33840

【作者名】

ありすきやるる

【あらすじ】

漫画とその他が大好きな少女達の、よくわからない帰宅風景。

「もぐもぐもぐもぐもぐ」

「……フフツ」

夕暮れ時、制服を着た二人の少女が並んで、高校から家路についていた。

車道側を歩く少女はざつくばらんとしたショートカットの黒髪で、女性にしては長身。背中に定規でも入れてるのではないかというくらいピンと背筋を伸ばしながら歩いていた。その後ろ姿は見るからに誠実そうであり、同性からお姉様と呼ばれた事がありそうだ。

後ろ姿だけではなく前方の姿を確認してみると、長身な少女はメガネをかけている。目や鼻など顔立ちは全体的にシャープである。よく言えば凛々しい、悪く言えば荒々しい（荒々しいが悪いかどうかの議論は置いておく）というイメージを見た人に持たせる。そんなイメージを持たせる彼女の手には一冊の文庫本があり、先程から姿勢正しくその本を歩きながら熱心に読んでいるようだ。

時折笑みを浮かべる彼女は、恐らく本の内容について笑っていると思われるが、笑い方にどこか影がある。その容姿もあいまって、悪巧みを思いついたように見えてどこか不気味である。

本にはカバーがかけられており、どのようなジャンルの本かは特定するのが難しい。彼女が使っているブックカバーには有名中古本販売店のロゴがあり、彼女が見ず知らずの人が読んだ本でも気にせず買う事が出来る人間であるという事がわかる。

「むしゃむしゃむしゃむしゃ」

長身な少女の隣を歩く少女は、長身な少女とは対象的に、茶髪混じりのセミロング。女性としても小柄であり、前に歩いているはずなのに体は時折上下左右に揺れている。時たま、隣の長身の少女にぶつかっている。長身の少女が車道側を歩いている理由は、偶然以外にも、そこに理由がありそうだとか、この少女が明るいパーソナ

リテイを持っていそうだな等が推察出来る。

小柄な少女は、目が大きくほっぺがとても柔らかそうで、よく言えばカワイイ、悪く言えば幼い（幼い事が悪い事かというのは恐らく大變議論の余地がある事かと思われるがこの場合は議論の場ではないのでスルーして頂きたい）というイメージを見た人に持たせる。そんなイメージを持たせる彼女の手、というより腕にはポイキーが抱え込まれている。持っているのではなく抱えている事。まるで食べる途中で誰かに取られる事を心配しているかのように、袋から取り出したポイキーを一気に食べ、あの柔らかそうなほっぺをまるでリスのように膨らませているその姿から、誰にもこのポイキーを渡さないという意志が伝わってくる。

食べる時にわざわざ擬音語を言っている理由は、きっと耳でもポイキーを食べる為に違いない。

「ごっくん」

「……フツッ」

長身な少女は本を読むのに忙しく、小柄な少女はポイキーを食べるのに忙しいようで、二人は先ほどから一言も会話をしていないし互いを見る事もない。しかし、身長差や歩き方が違うのに並んで歩いている事、長身な少女が車道に出て大變な事になりそうなのに文句を言わない事、時折小柄な少女が裾を引っ張り前を見て歩いている長身な少女をコントロールしている所を見ると、この二人は、きっと大變仲良しなのだろう。表と裏のようにどこか対象的だからこそ、二人は親友（心友でも可）レベルの仲良しさんなのかもしれない。

「睦月ちゃん、私、人を殺そうと思うんだけどー」

そんなレベルの仲良しさんだからこそ、唐突にこんな事も言えるんだろう。

間延びした声でいきなり物騒な事を言ったのは小柄な少女。ポイキーを『ごっくん』と、わかりやすく飲み込んだ後、急にそんな事を言った。その表情には悲壯感やら何かしらの決意を決めた色はな

く、ばわつ。とした、季節で言えば春という感じの表情をしている所を見ると、冗談のようだ。

「誰を殺すのかしら」

長身な少女、睦月もそれがわかっているようだ。本を読むのをやめようとしてもしないで、おはように対しておはようと返すような気軽さで、そう聞いた。睦月の反応から、どうもこの小柄な少女、脈絡なく突飛な話題を出すタイプの人間のようだ。

「え？ えつとね……」

睦月の、ある意味ごもつともな疑問を受け、小柄な少女は、ポイキーが潰れないように腕を組み、目をつむった。あざといくらいの考えてますポーズである。その結果、二人とも前を見ずに歩いていくという大変危険な状態になった。

「んー、睦月ちゃんでもいいや」

しかしその危険な状態も小柄な少女の危険な発言ですぐに終わった。

「そう。如月ちゃんになら殺されても構わないけども構わないらしい。仲良しさんだ。

「動機を教えてください。殺される理由もわからないんじゃ、死んでも死にきれないわ。私、化けてでちゃうかも」

睦月はそう言って、クスツと笑った。読んでいた本がおもしろかったのか、それとも化けて出るのも悪くないと思ったのかは、わからない。

「私も睦月ちゃんなら枕元に立つてもらっても構わないよー。むしろ、うえるかむ」

にぱーっと笑って両手を広げ、どんとこーいとアピールする小柄な少女、如月。さりげなく、ポイキーを睦月側ではない方の手に持った所を見ると、よほどポイキーを取られたくないらしい。

「じゃあ私は理由も知れずに殺されちゃうのかしら」

「だねー。かわいそうだけどそうなっちゃうねー。ごしゅうしようさまー」

「同情するなら教えてくれない？」

「いいよー」

素直なのか捻くれてるのか馬鹿なのか、判断に困る少女である。

「この前、マンガ読んでただけだねー」

「まあ、そうでしょうね。如月ちゃんが漫画以外を読んだとこ、見た事ないもの」

「それ褒めてるのー？」

「もちろん」

本を読みながらも、首を縦に動かした所を見ると、本気で思っているようだ。

「えへへへー」

睦月が冗談や皮肉ではなくホントに褒めてるとわかったのか、如月はわかりやすく照れた。照れながらも睦月の服を引っ張り、赤信号の存在を教えた所を見ると、天然なのか確信犯なのか判断に困る少女である。

「錬金術師の話の奴なんだけどー」

照れながら話を進めてきた。

「鋼の？」

「私は炎が好きかなー」

青信号を進みながら、如月は指パッチンをした。したが、火花はおろか、音すらしなかった。つまり不発であった。

「むー」

唸りながらもう一度。不発。もう一度。不発。

「睦月ちゃんも、もちろん知ってると思うけどー」

諦めが早い子である。

「一番最初に、主人公の兄弟がお母さんを錬金するでしょー？」

「人体錬成ね」

「そうそう。で、失敗して弟君は体と魂を持ってかれてー、お兄ちゃんは左足を持ってかれるでしょー？ あれを見て、私気付いちゃったんだよねー。人間の価値は人それぞれ違うって事に！」

「まあ、すごい」

大発見！というように如月は言ったが、睦月にとってはそんな事自明だったらしい。言葉とは裏腹に、全く驚いていない。

「でねー、やっぱり人間って、価値ある事をして生きていきたいよねー？」

「価値が無い事はしたくないわね」

「でしょー？ それにやっぱり、自分の持つ価値以上の事をしたいと思うのー」

「向上心の無い人間は馬鹿でしかないものね」

「その通りー、さすが睦月ちゃんは話がわかるなー。だから私、睦月ちゃんを殺そうと思ったのー」

にこーつと睦月は如月に笑みを向けた。その笑顔だけを見れば、カワイイ笑顔だ。しかし言ってる内容を加味すると、怖い笑顔に見えるから不思議である。

「だからの間を、出来るならもう少し私に教えてくれない？」

「お願いしますと言えば教えてあげようかなー」

「お願いします」

「うむ、くるしゅうない。教えてしんぜよー」

よくわからないが偉そうな少女である。しかし如月は、色んな面で幼いイメージを持たせるので、許してしまう人間が多数いると思われる。睦月もそちら側の人間なのか、それとも興味がないだけなのか（先程から一切横にいる如月を見ない所を見るとこの可能性も高い）、不快に思っている様子もなく、本のページをめくっている。「人間の価値が人それぞれ違うっていう真理に私が到達したって、さっき言ったでしょー？」

「いきなりラスボスになったのね」

「今の私は太陽さえも生み出せるのだよー」

よくわからない事を言って、如月はポイキーの箱を手にした。太陽のつもりらしい。自分にとってポイキーは太陽と同じくらいの価値があると言いたかったのかもしれない。しかし睦月は見向きも

しないので、その意味は伝わっていないようだ。

「お母さんの錬成に失敗したのは、等価交換の法則があれでそれだったからだよー」

「他にも色々理由はあるけど、そうね。対価が足りなかったのも一つの原因ね」

如月の言動はよくわからない事が多いが、睦月は理解しているようだ。さすが心友である。心と心が繋がっているのだろう。

「そう、対価だよ睦月ちゃん」

「そう、対価なのね如月ちゃん」

「対価があれば人の魂や体は手に入るという事なんだよー」

「対価……お金とか快樂とかかしら」

「生々しいなー。今は漫画の話だよー」

嫌そうな顔をしたが、如月は特に睦月の言葉を否定はしなかった。

二人は駅に着いた。彼女達は電車通学のように。改札を抜けながらも、二人は話を続ける。

「でねー、お母さんの魂と肉体を手に入れようとしたら、弟君は肉体と魂、お兄ちゃんは左足を持つてかれちゃったでしょー？しかも

失敗ー」

「悲劇的ね」

そう思ってるようには全く見えない。

「確かにかわいそうだよー」

こちらもそう思ってるようには全く見えない。

「弟君とお兄ちゃんは持つてかれた量が明らかに不公平だったでしょー？それを見て思ったの、人の価値は違うんだなーって」

「あれは確か、血の量が弟の方が兄より多かったからじゃなかった？」

「それにしても弟君は肉体と魂、お兄ちゃんは片足だけって、不平等じゃないー？等価交換が真理なら、兄弟平等に、んーっと、例えばお兄ちゃんは上半身で、弟君は下半身全部とかが正しいと思うん

「だけどー」

「まあ、そうかもね。それでその後、弟が兄の下半身を錬成して、頑張るのね」

そのシニールな展開を想像してか、睦月はクスツと笑った。

「でしょでしょー。でね、私はどうして弟君の方があんなに対価を支払ったのか考えたのー」

「考えたところ悪いけど、あれは対価じゃなくてペナルティーじゃなかったかしら。失敗した責任を取らされたみたいな。だから等価交換の原則には縛られないんじゃないかと思うんだけど？」

「え？あれって、お母さんの肉塊は一応錬成出来たから、その分の対価払ったんじゃないのー？」

電車が来た。睦月は本を読みながら、如月は腕を組んで考えながら電車に乗り込む。一人が座れる席はあったが、彼女達はどちらも座ろうとはせず、サラリーマンらしき男性の前に、吊り革を持ちながら並んだ。サラリーマンはじろじろと、特に如月を見た。茶髪が気になるのかもしれない。如月はそんな視線にはなれているのか、特に気分を害した様子はない。

「あれは母親とは縁えんも縁ゆかりもない肉塊じゃなかった？」

睦月の肉塊という言葉が聞こえたのか、サラリーマンが眉ねを寄せた。

「そうだっけー……でもまあ、ただの肉の塊だとしてもそれを錬成したんだから、その分の対価を払ったって事でいいんじゃないのー？」

如月の錬成という言葉聞き、サラリーマンはどこかホツとした様子だった。

「そういう考えもあるかもしれないわね」

「だよー。あー、よかった。勘違いしてるかと思ったよー」

如月は大袈裟な程、胸を撫で下ろした。そして、小首を傾げた。

「あれー？私、どこまで話したっけー……」

馬鹿と天然の可能性が高まった。

「弟の方が持つてかれた対価が多かったから、兄より弟の方が価値があつたんじゃないのかしら？つていう所までよ」

すかさずフォローが入る所を見ると、彼女達にとって、こういう展開は日常茶飯事なのだろう。

「そうだったそうだったー。思い出したよー」

実際はまだ自分が話していない所もフォローされているのだから、思い出すわけもないのだが。

「それでねー、弟君の方が価値がある理由を私は考えただけどねー。その結果、驚くべき真理にたどり着いたんだよねー」

「その真理を教えてもらつ前にちよつといいかしら」

「ちよつといいよー」

「そもそも私、弟の方が価値があるとは思わないんだけど」

「な、なんだつてー！！」

睦月が本を読みながら言ったその事に対して、如月はオーバーな反応をした。近くのサラリーマンが、迷惑そうに見ているが、二人は気にしない。

「どういう事なのさー！どう考えたつて弟君の方が対価を払つてるじゃないかー！高い方から持つていくのは世の真理じゃないかー！」

「確かにそれは世の真理だけどね。でも思い出してみても如月ちゃんその後、兄は右腕を対価にして弟の魂だけを錬成して成功させたでしよ？」

「うん、素晴らしい兄弟愛だねー」

「そうね。でもちよつと待つて。つまりそれつて、弟の魂の価値つて、兄の右腕一本程度つて事よね。とても弟の方が価値があるとは思えないんだけど」

「……………あつ、ほんとだ」

如月は、たつぷり固まつた後、ぽつりと呟いた。

「で、でもあれはさー、兄弟愛とかー、覚悟とかも対価にあつてこそだからー、そこには計り知れない価値があつてー」

如月は、弟の魂、右腕一本と、信じたくないらしい。

「そういう感情が対価として認められるなら、母親の人体錬成も成功したんじゃないかしら。覚悟は足りなかった気もするけど、母親に対する愛情は十分あったと思うし。それに右腕だけじゃなくて愛情や覚悟も対価として持っていけたなら、兄はその後、あんなに頑張らなかつたと思うわ」

「うっ、うー、確かにそうかもだけどー」

如月は納得出来るけども認めたくはないようだ。

「じゃ、じゃあ睦月ちゃんは、弟君の方が多く、っていうか先に対価を支払わされたのはなんでだと思うわけー？」

「弟の方が弱かつたからじゃないかしら。弱い方から取り立てられるのも、ある意味真理だと思わない？」

「あー……」

如月は負けてしまった。肩を落とし、私の考え方は間違っていたという絶望感が漂っている。実に可哀相である。庇護欲にかられる。近くのサラリーマンも、睦月の方を悪者のように見ている。

「古今東西、兄より弟の方が優れてるのが物語のお約束だし、それにもしかしたら、魂の方が肉体よりも価値が低いのかもしいわね」

サラリーマンの視線が嫌だったわけではないだろうが、睦月は落ち込んでいる如月に対してフォローらしき事を言った。

「そうだよそう！私が言いたかつたのはそういう事なんだよー！」

如月は元気を取り戻した。

「肉体の価値が弟君の方が高いからー、高いからー、高いからー……なんだっけー……」

そして言いたい事を忘れたらしい。

「兄より弟の肉体の方が価値が高い理由は、身長が高かつたからじゃないかしら。っていう流れに持っていきたいんじゃないの？」

「そうそれー！！」

睦月はまたフォローした。どうも睦月には、如月の考えが手に取るようにわかっているらしい。心友だからだろうか。それとも読ん

でいる本に書いてあるのだろうか。

「魂とはすなわち記憶やら感情やらの集合体だと仮定すると肉体がなければ無用な産物無価値な産物、ならば肉体の方が優位なのはある種当然の事という事なら、その肉体の価値の高さはいかに決めるかを考えなければならぬ、ずばりそれは肉体の質、つまり筋肉や骨や血液や歯並び、いや、それよりも明確な価値を決めるものはずばり身長の高さか、あう、舌嚙んだよ」

如月は、真つ赤で小さな舌をべーっと出して痛い痛いと言った。サラリーマンは急に人が変わったようにぺらぺら喋った如月に驚いていたが、睦月は気にならなかったようで、静かに読書が続けた。

そしてとある駅に着いた。睦月は本を読んだまま、如月は舌を出したまま電車から降りた。サラリーマンは、話しの続きが気になるのか、名残惜しそうに二人の姿を目で追っている。

「睦月ちゃん痛いよー」

「ふーふーしてあげようか？」

しかし二人がそんな視線を気にするわけもなく、電車から改札、改札から家に向かう。

「お願いするー」

「でも如月ちゃんがすでに自分でふーふーしてるんだから、もう十分かもしれないわね」

「あつ、ほんとだー。全然痛くないやー」

ブラシボー効果なのかよくわからないが、如月は復活した。

「でねでねー……どこまで話したっけー」

そして三度目の記憶喪失である。

「弟の方が身長が高かったから、兄より肉体の価値が高かったのではないのか。もしそうなら、私より睦月ちゃんの方が価値があるんじゃないかしらー。っていうとこまでよ」

そして三度目の先回りフォローである。

「そうだったそうだったー。そうなんだよー、私より睦月ちゃんの方が価値があるんじゃないかなーって思ったんだよねー」

「思っちゃったのね」

「だって睦月ちゃんの方が身長あるしー、胸もあるしー」

注意していただきたい。睦月はスレンダーな体型であり、胸もそれほどあるわけではない。如月が、可哀相な胸（それが可哀相なのかステータスなのかは個人の判断に任せる）なのだ。

「それに体重もあるしねー」

最後にそれを言ったのは、きっと如月が自分の体型にコンプレックスを抱いているからだろう。つまり要約すると、余計な脂肪ついてるから体重があるんだよばかやろうー。と、如月は言ったのだらう。

「そうね。確かに私の方が身長高いし、体重も如月ちゃんよりはあるわね」

睦月は怒っているようには見えない。

「でも如月ちゃん。如月ちゃんの方が私より運動出来るじゃない。

つまりそれって、色んな意味で、色んな意味で、色んな意味で、運動に適した体をしてるって事じゃない？」

怒っているようには見えないが、怒ってるのかもしれない。

「でねー」

「うん」

両者ともに、この話題をやめる事で一致したようだ。

「人間は価値ある生き方をしなければならぬーって、言ったでしょー？」

「言ったわね」

「それも自分の価値よりも高い価値がある事を成し遂げたいでしょー？」

「確かにそうね」

「睦月ちゃんの肉体は、私より価値があるでしょー？」

「身長の高さが価値ならね」

「だから私、睦月ちゃん殺す事にしたのー。自分より価値あるモノを壊すって、自分より価値あるモノと一つになると同じくらい、すごい事だと思うんだよねー」

ようやく。本当にようやく、如月が睦月を殺す理由にたどり着いた。

如月は手に持っていたポイキーの箱から、ポイキーを一本取り出した。そして、ニコツと笑い、それを睦月に向けた。それで殺す気らしい。

馬鹿にする事なかれ。ポイキーで人を殺す事は出来る。ポイキーを目に突き立てたり耳に突っ込んだり口に突き刺したりすれば、死ぬ。ポイキーはお菓子であり凶器なのだ。

「大丈夫だよー。魂までは取らないからねー。肉体が無い魂の価値は右腕一本だからねー。そんなの私じゃないもん。存分に私の枕元に立ちたまえー」

そう言っで、如月は、ここまでの家路で初めて睦月の前に立った。立ち塞がった。ニコニコと笑いながら、ポイキーをナイフのように、未だに本を読み続ける睦月に向ける。

睦月が言った通り、如月は運動が得意だ。ぴょんと飛び跳ね、目にポイキーを突き立てるのはたやすいだろう。今の状態では文庫本が邪魔で不可能だが、そんなのどうにでもなりそうだ。

「つまりこういうことね？」

睦月は文庫本を閉じ、初めて如月を見た。

そして睦月は、冷たいと言われても文句は言えない目で、見る者全てに安らぎをもたらすような温かい笑みを浮かべている如月を見下ろしながら言う。

「私が貸した漫画を読み終わったから、また漫画を貸して下さい。貸さないと殺すぞって事ね？」

「その通りー！！正解者の睦月ちゃんにはポイキーをプレゼントー！」

如月は凶器代わりに使っていたポイキーを睦月に上げた。睦月は

「ありがとう如月ちゃん」と答えて、それを受け取り食べ始める。
「ねえねえ、今度はどんなマンガ貸してくれるのー？」

自分の定位置である睦月の隣に戻り、如月はニコニコと笑いながらそう聞く。

「そうね。私が今読んでもこれは、なかなかおもしろいけど……」

如月が隣に戻ったのを確認した後、睦月は歩き出す。もちろん、歩幅を如月に合わせるのは忘れない。

「ダメだよ睦月ちゃん。私、小説とか読むと、すぐ眠くなっちゃうんだよー。知ってるでしょー」

「もちろん知ってるわ。大丈夫。これ、漫画だから。文庫サイズの漫画なのよ？」

如月は睦月に読んでいた本を見せる。そこには確かに文章ではなく絵が描かれていた。

「あつ、ほんとだー。見して貸して触らしてー」

「ダメ。まだ私、読み終わってないから」

「ちよつとでいいからー」

「ダメよ。後でね」

如月は手を延ばして睦月から文庫本を盗ろうとするが、いかんせん身長差がある。睦月が手を上にあげてしまえば、さすがの如月も届かない。

「むー、どんな話しかくらは教えてよー」

「そうね。死体を宅配する話なんだけどね。如月ちゃんが大好きなタイプの話かな」

「スプラッター系？」

「スプラッターっていうほどじゃないけど、グロテスクはグロテスクよ」

「いいねいいねー。早く読みたいなー。目とか飛び出したりするー？」

「ええ、もちろん。でろでろよ」

「でろでろかー。どんな感じなのかなー。スプーンでえぐり取った

りするのかなー。」

太陽は完全に沈み、すでに夕暮れ時から夜になっていた。

「フフツ、それも楽しそうね」

「ホルマリン漬けにして飾るんだよー。怖いね怖いねー」

「目じゃなくて、子供の頭をホルマリン漬けにする話があったわ。明日それも持ってきてあげるわ」

「ほんと？ありがとー！お礼にポイキーあげるねー！」

少女達が歩く道は、人通りが少なく、外灯が気休めに設置されている程度。

「こちらこそありがとう」

「どういたしましてー。ねえねえ他にはどんな話があるのー。教えてよー」

「そうねえ……ああ、美容師が人間をバラバラにして遊ぶ話があったわ。如月ちゃん、そういうの好きでしょ？」

少女達がまさに今、通り過ぎた電柱の横には『変質者に注意！』という看板が設置されていたが、少女達にはまるで危機感がない。自分達がまさか襲われるとは思っていないのだろう。

楽しそうに、お喋りをしている。

「うんうん、大好きだよー。それって、あれでしょー、首とか切つて、付け替えたりするんでしょー？」

「その通り。でも首だけじゃなくて、手とか足も付け替えるのよ？」

「うわー！いいねいいねー！私もしてみたいなー……あつ、もちろんお人形をだよ？睦月ちゃんバラバラにしようなんて、これっっぽっちも考えてないよ？」

「ええ、わかってるわ」

クスツと笑い、睦月は後ろを振り返る。如月も、それに合わせて振り返る。

少女達の後ろには、サラリーマンがいた。電車にいたサラリーマンだ。偶然帰り道が一緒だったのか。それとも少女達の話しの続きが気になったので、ついてきてしまったのか。それとも、少女達の話し以外が気になって、もしくは気にいって、ついてきたのか。それはわからない。しかし、サラリーマンは立ち止まり、少女達（特に如月を見て）ニヤニヤ笑っている。という事だけは、描写して置こう。

「バラバラにするのはお人形だけでしょ？」

何がおかしいのかはわからないが、睦月は笑みを浮かべている。

「それと私より価値がある人間。あの人、私よりとっても価値ある人間だと思うんだよねー、魂は別としてだけどー」

如月も笑っている。違う点は、睦月は月のように笑っているが、如月は太陽のように笑っているという事か。豆知識というか常識の部類だが、月を自ら輝いているわけではない。太陽の光りを受けて輝いているのだ。だからどうした。という話だが。

サラリーマンは何も言わず、ニヤニヤと笑いながら、鞆から何かを取り出そうとしている。

それを見た少女達は。

「あなたの魂、頂きます。じゃないって事ね」

「そうそう、どっちかというと、あなたの肉体、頂きます。って感じー」

「如月ちゃん。それ、卑猥な感じよ」

「ほんとだー」

危機感零の会話をしながら、脱兎の如く逃げ出した。

「睦月ちゃん睦月ちゃん、なんか怖かったねー」

如月は睦月に話しかけながら、後ろを確認。サラリーマンが「えっ、いや、ちょ、おまつ」とか言いながら、追ってきていた。

「なんかっというか、とてももなく怖かったわ」

如月も睦月も、猛ダッシュしながら、至っていつも通り会話をしている。如月の方が運動は得意と言っていたが、睦月も運動が苦手なわけではないようだ。さすがに物を食べる余裕や、本を読む余裕はないようだ。

「危ない会話したらいなくなるかなーって思った私が甘かったのかなー。あつ、カステラ食べたいなー。生クリームがあつて、あまーいの」

「こらこら如月ちゃん。自分の趣味をさりげなく演技で片付けないの。恥じる事はないわ。私だって、目をえぐりたくなる時があるわたまに」

「睦月ちゃんこそさりげなく私より一般人みたいに装ってー。私は満月が近いとちよつとあれなだけだからねー。睦月ちゃんは週に三回はあれになるじゃーん」

「私には複数の人格があるから仕方ないのよ」

「睦月ちゃんがただのマンガ好きなのかそれとも病気なのかたまに私はわからなくなるよー」

「如月ちゃん。家、着いたわ」

「ほんとだー」

とかなんとか。命の危機から楽しく逃げていると、二人は無事家についた。

後ろを見ると、サラリーマンはすでにいない。諦めて帰ったのか。それとも元々、そういう人ではなかったのか。真実は闇の中である。

「じゃ、また明日ねー。マンガよろしくねー」

ぶんぶんと手を振って、如月はとある一般住宅に入ってしまった。

「ええ、また明日」

ひらひらと手を振って、睦月はその住宅の横の高級マンションに入ってしまった。

今日も無事、少女達は帰宅出来た。

めでたしめでたし・・・

（後書き）

果たしてこの後書きまでたどり着く人はどれだけいるのだろうか。とりあえず、ありがとうございましたと言っておこう。誰にも伝わらないかもしれない感謝の言葉を。

さて、なんか哲学が流行ってるという噂を聞いたし連載小説が書けないので、哲学っぽい短編書こうと思ったら、こんなになっしまいました。

なげえよ。という感想、お待ちしております。ですよねー。と、返信します。哲学のカケラもねえよ。という感想、お待ちしております。ですよねー。と、返信します。サラリーマンなんだったんだよ。という感想、お待ちしております。さあ？と、返信します。結局、何？という感想、お待ちしております。カステラ食べたい。と、返信させていただきます。続きとかあるの？という感想、お待ちしております。あります。あれば連載になってるわー。と、返信させていただきます。

では、さようなら。

皆様も、帰宅時にはご注意下さい。

わかりやすい変質者なんて、そうそういませんよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3384o/>

よくわからない少女達の家路

2010年10月16日03時25分発行